

ジムという空間

ーフーコーの『監獄の誕生』に見る規律・訓練ー

金本 勝人

近年、日本では健康志向の高まりや国の健康政策を背景として、フィットネスジムが急速に普及している。ジムは一般に「身体を鍛える場」として理解されているが、本論文は、ジムという空間が単なる運動施設にとどまらず、利用者の身体や意識に働きかける社会的装置として機能している点に着目する。そこで本研究では、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』における規律権力論を理論的枠組みとし、ジム空間における規律・監視・自己管理の構造を明らかにすることを目的とした。

第1章では、フーコーの議論をもとに、身体刑から監獄への移行過程を整理し、近代社会において権力が身体を直接処罰する形態から、規律訓練を通じて内面化される形態へと変化したことを確認した。特に、パノプティコンに象徴される「見られているかもしれない」という状況が、主体の自己規律を促す仕組みである点を示した。

第2章では、日本におけるフィットネスクラブの発展過程を、健康増進法やスポーツ基本法などの政策的背景と市場動向から検討した。その結果、ジムは健康づくり政策と結びつきながら多様化し、利用者のライフスタイルに適応する形で拡大してきたことが明らかとなった。

第3章では、トレーニング歴の異なる利用者へのアンケート調査を行い、ジム空間における身体意識や他者の視線、自己監視のあり方を分析した。その結果、ジムでは外的な監視だけでなく、利用者自身による自己管理や規律の内面化が強く働いていることが確認された。

以上より、ジムは現代社会における規律権力が日常的に作用する空間であり、利用者は自発的に身体を統制する主体として形成されていることが示された。